

29-1120 W113-11

アトピー性皮膚炎治療に用いるステロイドおよび免疫抑制薬のリンパ球抑制効果に基づく薬効評価

○杉田 栄樹¹, 福島 悠代¹, 平野 俊彦¹, 岡 希太郎¹, 住田 治子², 伊藤 友章², 小宅 慎一², 坪井 良治², 明石 貴雄³ (¹東京薬大薬,²東京医大病院皮膚,³東京医大病院薬)

【目的】アトピー性皮膚炎(AD)の治療において、副腎皮質ステロイドやタクロリムスの軟膏が用いられている。しかし、それらには、局所的・全身的副作用を生じる恐れもあり、そのリスクを軽減させるための適正使用が望まれる。本研究では、まずタクロリムスのリンパ球抑制効果と治療効果との関連を調べた。さらに、ステロイドのリンパ球抑制効果を比較検討した。

【方法】患者又は健常者の血液より、末梢血単核細胞(PBMC)を分離し細胞数を調整後、 $195\mu\text{L}$ ずつ96wellプレートへ分注する。そこへ、リンパ球刺激物質としてカンカナバリンAを添加後、さらに各種免疫抑制薬を添加する。5%CO₂インキュベーター中で72-80時間培養し、さらに³Hチミジンを添加し16時間培養する。その後、細胞に取り込まれた³Hチミジンの放射線量を測定し、それを基にIC₅₀を測定する。

【結果および考察】タクロリムスのIC₅₀が低い患者では、ADのClinical scoreも相対的に有意に低かった。各種ステロイドのIC₅₀の比較においては、リンパ球抑制効果がステロイドの臨床効果と同様の傾向を示した。また、親化合物に比べるとエステル化された化合物の方に効果が強い傾向が見られた。タクロリムスのリンパ球感受性試験法は、タクロリムスの治療効果を反映する指標となりうると考えられる。リンパ球に対するステロイド薬の抑制効果は、薬物強度分類表の相対強度と同様の傾向を示し、また、ステロイド薬は親化合物よりもエステル化された化合物の方が強い免疫抑制効果を示すと考えられる。